女ようし
教きょう草くさ

教神女房

形気 四編

上巻

山東庵作

豊国画

戊申新春

錦寿堂寿梓

○女房形気四編上冊

あらゆる人の女房として
妬をやくハ和漢
古今の通弊
なり然れども
日本ハ君子国
なる故に日本紀
古事記をぶんえさる神代の
やうすにても神さへ
ちあさしもろこしハ夷の国なるゆへ
しみ〻と悍妬あり漢の高祖
の本妻呂后が腹に男子一人
あり妾戚夫人も男子一人あり高祖戚夫人ゆへ
なるをあいてあとつぎに立んと思ひ呂后

弘化四年丁未夏五月稿本
仝年晩秋上梓 發販

高祖死ければ本妻の呂后つゐに子をたくて天子とを
見を惠帝とのべ則ち呂后夫の妾を戚夫人をとり
へて手足くり目眼をとり耳鼻をとりすべ茶をのまして瘖と
なし厠の中へいれおくをあくとて死も

中ごろ元とを人の妻妾と名づけるは酷妬の本家とのべ一名の出
店なるは後漢の袁紹が本
妻をもと病死して後妻五人をとり此すべて地下史記に
をもとあれとも五人が名を数をそりあらうわ
かれられまをあーけり此二十八日の本あり名古今
ひるあの大名のもとれらのあの国あのまびでめ
見えびもの国をもえられば謝絶五雑組
ものもの例をあまたあげて婦人不妬百拙
三代物語
ものもの大も
ものもの定家の女
阿仏尼が乳母さ
ものもの

掩ふ足りとられどさふやぐるもとのあふ
ものと人あり又此ふ紙
されべとも人ふたつけられあるひはの火ふあるふ
たどんのもうあるかをもつふ者おこり
くちてあのもけやげ
んもあるぞうく
ものもうくちうにほて
るうへをりうぞもとの
叩いるもつけのもけんと
とある

源氏を匿ひの女房れ
ばまよのふさぐあふのもの
火をけんとをの火をけんとを
のえうひの火をうく
あぐもれ火をそろ
そろとあぐふやけば
やのもけかもうぐ
ぞるくも火がるりてあぐ
もうければ火つまもやるくもと
もまう俗のあぐえもをねぐ借
老のもぐりをまるくもるぞーもの
やのもをあげふもるる女房形
えれの四ろん左のごとー

本文発端

今のむかしまさるのかこのとろうまとろいの
れいのふ九月まいの秀やこれいかすこと
なるをつりまこの板のまよかつぶーのあきれおそろく
ひのかあすかこさこ不さけのいの月
たるのまるあちびさ必ぞ二ちち
るくてあるとまるかつぶ一る
べーあるばかーを　そ
二十六七母ろ
ちえ色こと
六十ぼゆそ
みがこれ
ゆるかーを
日さるるくふでる
るまみくれた母が
ひのあきるいれぬこと
されどかーを十ハ
母をいろあたもいの
るそよくかせぐゆふくいふかい
ゆがくれ教ひもつのものかーら
をがくるまろかどれバなちん
いさくかのくぐゆかくいるり
けりこれひかーを
ぐゆるこれふひきうえいりとのあ
ふいうくりきとまるふけてあはの

正ちきうとどうあて母のふあとのさうば
かこゆいどこでえりとそとりふくびく
るしどうひゆりをうきあれの
みゆのハしゆるいる
ゞ十七の月ゆ
大くるえあつ日
さうえりくえ女
ちをこいぐけりきるふ
あーさうをち四十六七
ゆそすゞもうのあつまハ
あるゆとて四さふあいまこ
とこーゞまゞちそのれ
秋のゆこちそのれ
るおとそのそあて
おのえふる
をつけちく
くろくるり
ーとさう
右ろゞつま一

才二段
かれ田や女房

竹吉
その二

第四段

おへそ
さいのかよ

おいる

歴世女装考 四巻上梓
京山人百樹著

此書は神代のむかしより百年おもきの世あらましのうつりかはりの・なりふり・髪・元服・はをとめるのつとめ・かんざしのつかひ・ちりめんさくのうを・古来の古風をあらためかんがへるのおもしろみ

嘉永三庚戌春新版目録

品定五人娘 京山作 豊国画 初編二編

源氏雨夜の品さだめ五人の娘あるいはむくふ世をもつる幸をまつりろくかきはぐりつる州ざーーろう

雛鶴笹湯壽 京山作 豊国画 全一冊

だにもろ大形なるうさうとかろくあげめでくさ也と絵ぶすのうとおりろくかきたるなるれば見あげ上と右なり

教草女房形氣 同作 同画 八編 九編

ちり塚物がたり 同作 同画 三編 大尾

新撰狂句會 立斎廣重画 初篇 二篇

つぎあて稲妻草紙 玉川亭調布作 錦朝楼芳虎画 初編ヨリ五編マテ 大尾

かな手本忠臣蔵 好古斎主人作 芳虎画 二冊

江戸中橋廣小路
山田屋庄兵衛板